

司法面接の繰り返しの効果

——大学生と小学生の比較——

井上愛弓・仲真紀子

（北海道大学大学院文学研究科）

問題と目的

先行研究では、目撃記憶などを繰り返し聞き取った場合、特に子どもにおいて報告の誤りが増加することが示されてきた（e.g., Ackil & Zaragoza, 1998）。Ackil & Zaragoza（1998）では、小学校1年生、3・4年生、大学生を実験参加者として、刺激映像について強制的に作話させ、1週間後に記憶テストを行った。その結果、全ての年齢群で刺激映像の内容についての報告の誤りが増加しており、この報告の誤りの増加は、低い年齢群で特に顕著であった。このような知見から、子どもから正確に報告を聞き取るための手法である司法面接ガイドラインでは、面接は1度だけ行うことが推奨されている。

他方で、司法面接では、面接者は子どもに自由報告を求め、誘導的な質問は使用しないようにしている。このような誘導のない面接法を用いた場合であっても、面接の繰り返しは避けるべきであろうか。本実験では、小学校低学年（1・2年生）、中学年（3・4年生）、大学生を対象として、司法面接を繰り返し行い、その効果を調査した。（1）小学校低学年、中学年、大学生の順に報告の正確性は低いのではないかと、（2）司法面接であれば、面接を繰り返し行っても面接1回目から2回目にかけて報告の正確性は低下しないのではないかとという2つの仮説について検討する。

方法

29名（小学生低学年9名、小学生中学年10名、大学生10名）が本実験に参加した。参加者には、約1分間のDVDを提示し、5分後に1度目の面接を、1週間後に2度目の面接を行った。DVDは偶発学習とした。すなわち、参加者に色の塗り分け課題を求め、その過程で「色の塗り分け課題の練習と本番の間に、休憩しているつもりで観てください」と教示し、DVDを提示した。各面接の所要時間は10分程度であった。面接は、NICHDガイドライン（Lamb et al., 2007）に従い、ラポール段階、自由ナラティブ段階、質問段階と、順に行った。質問段階ではオープン質問のみを使用した。

分析

DVDの内容と一致した報告を「正答」とし、DVDには存在するが属性が違う報告を（「白いTシャツ」を「黒いTシャツ」と報告した場合）「誤答」とした。また、DVDには存在しないものを報告した場合を「作話」とした。正確性は、全報告情報のうち正答が占める割合で算出した。

結果と考察

報告された項目数は、小学校低学年で平均30.67項目（1回目 $M=28.11$ 、2回目 $M=33.12$ ）、小学校中学年で平均32.95項目（1回目 $M=30.90$ 、2回目 $M=35.00$ ）、大学生で平均44.60項目（1回目 $M=44.90$ 、2回目 $M=44.30$ ）であった。また、報告の正確性は、小学校低学年で平均0.86（1回目 $M=0.90$ 、2回目 $M=0.82$ ）、小学校中学年で平均0.87（1回目 $M=0.91$ 、2回目 $M=0.86$ ）、大学生で平均0.92（1回目 $M=0.92$ 、2回目 $M=0.92$ ）であった。3（年齢群：低学年、中学年、大学生） $\times$ 2（面接回：1回目、2回目）の分散分析の結果、面接回に主効果がみられ、面接1回目よりも2回目で報告の正確性が低かった（ $p<.01$ ）。また、交互作用が有意であり、下位検定の結果、低学年でのみ面接1回目よりも2回

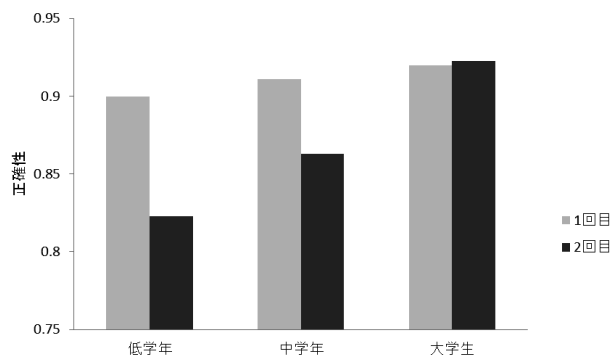


Figure1
各年齢群における面接1回目と2回目での報告の正確性

目で報告の正確性が低かった（ $p<.01$ ）。以上の結果から、仮説（1）は支持されず、司法面接で報告される内容の正確性については、年齢差はみられなかった。仮説（2）も予測とは異なり、小学校低学年では、面接を繰り返した場合、報告の正確性が低下した。

このことから、誘導のない面接を行うと、低学年でも大学生と同程度の情報が得られるが、面接を繰り返すと低学年の報告の正確性は低下することが示された。原因としては、情報源の混乱などが考えられる。